ミライフ賞

大きな手

埼玉県　春日部市立備後小学校　五年
米島　夏綾

学校から家に帰る時、小さな公園の横を通る。公園から明るい声が聞こえてくる。声のする方に目を向けると、小さな子がお母さんと楽しそうに遊んでいた。元気だな、とほほえましく思いながら自分の手を見る。そこには、いつの間にか大きくなった手があった。

新型コロナウイルスの感染拡大のせいで、放課後や休日に友達と遊ぶ機会は減っていた。学校に行く以外はほとんど家にいた私を見て、ある日お父さんとお母さんは一緒に公園に行かない、と言ってくれた。少しはずかしい気持ちもあったが、外で遊びたかった私はすぐに支度をした。家から近い公園なのにすごくうれしかった。小学校に入学する前に三人でよく来ていた久しぶりの公園は、昔と何も変わっていなかった。しかし、遊んでいる内に何かおかしいと思い始める。すべり台ってこんなに小さかったかな、ブランコのすわる木の板ってこんなにせまかったかな。私は久しぶりに来たからそう思うだけだと考え遊び続けた。体をあまり動かしていなかったのは、お父さんもお母さんも同じ様で、しばらくするとベンチにすわり休んでいた。二人の話している声が聞こえてくる。

「三人でここに来るのは何年ぶりだろう。少し前まで毎日の様に来ていたのにね。また、三人で遊びに来る事はあるのかな。」

いつからだろう。友達としか公園で遊ばなくなったのは。いつだったのだろう。最後に三人で公園で遊んだのは。そう考えると、私のむねはなぜか熱くなった。

公園からの帰り道、久しぶりに外で遊べた私はすっかりつかれていた。そんな私に気が付いたお母さんが昔みたいに手をつないでくれた。そのしゅん間、私はおどろいた。お母さんの手はいつの間に小さくなってしまったのだろう。

「あら。ずい分手が大きくなったのね。」

その一声で私は気が付いた。すべり台やブランコ、そしてお母さんの手が小さくなったのではない。私の体が、手が大きくなっていただけだと。

私がコロナにかかった時、泣いて謝る私に謝る必要なんてないよ、と言いながら優しくだきしめてくれたお母さん。よし、今日からしばらく家の中でキャンプだな、と笑いながら本当にテントの用意をし始めたお父さん。どれだけつかれていても、どれだけ大変な事があっても、いつも笑っているお父さんとお母さんが大好きです。お父さん、お母さん、本当にありがとう。まだまだ子供の私だけど、少しは大きくなれたかな。また三人で公園に遊びに行こうね。

重いランドセルと戦いながらも、ようやく家に着く。すぐに百点を取ったテストをお母さんに見せる。お母さんは、よくがんばったね、と優しく頭をなでてくれた。小さくなったけど、大きいままの手で。

評価のポイント

何気ない日常の体験が丁寧に描かれており、公園で遊ぶ三人の姿が目に浮かびます。「手」に着目して進むストーリーはまるで映画を見ているようです。